

## 教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究(その2)

木原 成一郎・重見 典孝\*・松田 泰定  
(2003年12月3日受理)

### An Empirical Study on Trainees' Concern about Teaching in Physical Education at the Attached Primary Schools of the Hiroshima University, No.2.

Seiichiro KIHARA, Noritaka SHIGEMI and Yasusada MATSUDA

**Abstract.** This study aims to grasp the improvement of the implementation about trainees' planning and teaching in PE lessons at the attached primary schools of the Hiroshima University in 2002 as compared with 2000. Furthermore this study aims to clarify the change of trainees' concern about teaching in PE lessons before and after the school experiences in 2002 as compared with 2000. The results are summarised as follows: 1) During the school experiences, 76% of trainees taught PE lessons and also 83% of trainees planned the PE lessons in 2002. Both of the percentages are increased very much compared with 2000. It is expected that more balanced contents should be taught in the PE lessons by trainees. 2) Introducing of the trial teaching to the PE programme in our initial teacher training course increased trainees' concern about teaching in PE lessons before and after the school experiences in 2002 as compared with 2000. It seems that the PE programme should deal with the trainee students' concern about teaching PE lessons after the school experiences.

#### はじめに

教員養成機関における「実践的指導力」の向上の要請を受け、2003年9月に日本教育大学協会の「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクトから「教員養成の『モデル・コア・カリキュラム』の検討—中間答申」(以下「中間答申」と略)が提出された。この「中間答申」(2003)は、「教員養成カリキュラムにおける『モデル的なカリキュラム』を自らの主体的な営みとして策定」したものとされている。ここでは、大学入学の1年生から4年生まで、「教育実践体験」「実践開発実習」「教育実習」という学校体験と「教育フィールド研究」という大学の授業を連携させた「教員養成コア科目群」を特徴とする教員養成カリキュラムが示されている。この「教員養成コア科目群」の中でもやはり最も中心的な学校体験は、3年次に実施される全員必修の教育実習であろう。

長谷川悦示他(2001)や日野克博(2002)は、体育科教育の分野で教育実習と大学の授業の連携を

具体化し、学生に「実践的指導力」を意識化させる方法として模擬授業の有効性を検討している。こうした状況を踏まえ、2000年4月に教育学部と学校教育学部が合同して新たに発足した教育学部第1類学校教育系の体育科目を担当する我々は、模擬授業を取り入れた体育の教員養成カリキュラムの改善に取り組んだ。

#### 2. 研究の目的

本研究の目的は、第1に広島大学附属三原小学校と附属東雲小学校並びに附属小学校(2002年度のみ)で行われた2000年度と2002年度の教育実習の実態を比較し、実習生が体育科の授業を教えることに関して改善された点と残された課題を明らかにすることである。第2に、学生がいただく体育科指導に関する心配が教育実習を経験することでどのように変化するかを把握し、2000年度と2002年度の結果を比較して両者の相違点と共通点を明らかにすることにある。

\*広島大学大学院教育学研究科生涯活動教育学専攻

### 3. 研究の方法

木原成一郎他(2002)は、「体育授業を教える事の心配」17項目からなる質問紙(表2参照)を作成した。表2の17項目は、1)教師として教える課題(A, C, F, H, K, M, P), 2)子どもを把握する課題(B, G, J, N, Q), 3)教師としての資質(E, I, L, O), 4)実習校の情報(D)の4つの分類に区分された。

さらに、木原他(2002)は、2000年度の広島大学学校教育学部の教育実習生の教育実習前後に質問紙調査を実施し、以下のような結果を報告した。つまり、体育授業の指導を経験した指導群と経験していない非指導群別に、事前と事後の平均値を比較した結果、両者に変化の異なる項目が見られた。つまり、自分が模範を示せない運動を教えられるか、各種目に必要な運動技能を指導できるかが両者ともに減少したのに対し、教師に認められ受け入れられるかという心配は、指導群の方が著しく減少した。また、指導群と非指導群の両者とも子どもが安全に運動できるか、運動の苦手な子どもへの配慮ができるかという心配を増大させているのに対し、体育用具の準備や体育施設の管理ができるかという心配は、指導群のみ増大した。この結果は、教育実習で体育科の授業を指導することが実習生の「体育授業を教える事の心配」の差を生み出す要因であることを示唆している。

そこで、本研究では、木原他(2002)の用いた「体育授業を教える事の心配」17項目からなる質問紙を、2002年度の教育学部第1類学校教育系の実習生の教育実習前後に実施し、2000年度の広島大学学校教育学部の実習生の結果と比較することにより、大学の体育授業に模擬授業を導入したことによる「体育授業を教える事の心配」の変化を把握することを意図した。

#### 1) 調査対象者

広島大学学校教育学部の小学校教員養成課程の体育カリキュラムは、表1にあるように、3セメスターで教科専門科目の必修である初等体育1を履修し、5セメスターで必修の初等体育科教育法を履修して教育実習に臨み、教育実習後は6セメスターで選択科目の初等体育科授業研究と初等体育2を履修していた。これに対し、新たに発足した教育学部では、同じく表1にあるように、3セ

メスターで音楽と図工と体育の内から2科目を選択して必修する教科専門科目の初等体育を履修し、4セメスターで選択の体育科学習材講義、5セメスターで必修の初等体育科教育法を履修して教育実習に臨み、教育実習後は6セメスターで選択科目の初等体育科授業研究、7セメスターで初等体育科教育法2を履修することにした。

両者を比較して改善された主な点は次の2点である。第1は、体育科学習材講義と初等体育科教育法で学生が教師役と子ども役を務める模擬授業を実施したこと。第2は、5セメスターの教育実習を実施する各附属小学校を2校から3校に増加させたことと220名から180名へ学生定員が減少したことにより、教育実習で各クラスに配属される人数が約10名から約5名に半減したことである。

広島大学学校教育学部の教育実習(2000年度)は、3年生前期に実施される1週間の公立小学校での観察を中心とする教育実習1と3年生後期に行われる各1日の事前及び事後指導を含めて附属三原、附属東雲の附属小学校2校で5週間実施される教育実習2で構成されていた。また、広島大学教育学部の教育実習(2002年度)は、3年生前期に実施される各1日の事前及び事後指導を含めて1週間の附属小学校3校での観察を中心とする教育実習指導Aと3年生後期に行われる各1日の事前及び事後指導を含めて附属小学校で5週間実施される小学校教育実習から構成されていた。

2002年度の教育実習は、2002年9月4日から10月3日までの5週間実施された。附属三原小学校では学生は寄宿舎に宿泊して実習を行い、附属東雲小学校と附属小学校配属の学生は自宅から通学して実習した。なお附属小学校は各教科とも教科担任制をとり、附属三原小学校と附属東雲小学校は学級担任制をとっていた。

実習生に対する調査は、質問紙調査法によって行った。教育実習前の調査は、2002年7月に初等体育科教育法の授業で学生に配布し提出させた。調査対象者は、教育学部3年生185名であった。有効回答数は168名(有効回答率90.8%)であった。回答者の性別は男性29.8%、女性70.2%である。

教育実習後の調査は、教育実習終了直前に配属された実習校のクラスの指導教官を通じて実習生に記入させ回収した。調査対象者は、附属三原小

教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究(その2)

表1 学校教育学部(2000年度)と教育学部(2002年度)の小学校教員養成における体育科目

セメスター	3		4	5		6			7
学部	教育	学校教育	教育	教育	学校教育	教育	学校教育	学校教育	教育
科目名	初等体育	初等体育1	体育科学習 材講義	初等体育科 教育法1	初等体育科 教育法	初等体育科 授業研究	初等体育科 授業研究	初等体育2	初等体育科 教育法2
必修の区別	選択必修	必修	選択	必修	必修	選択	選択	選択	選択
内容の概要	実技	実技	実技と模擬 授業	講義と模擬 授業	講義	講義	講義	実技	実技指導実 習
担当教官数	4	4	1	1	2	1	1	4	1
授業種別	教科専門	教科専門	教科専門	教科教育	教科教育	教科教育	教科教育	教科専門	教科教育
学生数	156	273	84	182	273	26	15	70	19
教育実習				教育実習指 導A	教育実習1	小学校教育 実習	教育実習2		
期間				1週間	1週間	5週間	5週間		
開講場所				附属小学校 3校	公立小学校	附属小学校 3校	附属小学校 2校		
学生数				182	273	182	273		

学校配属の学部3年生62名, 附属東雲小学校配属の学生62名, 附属小学校58名, 計182名であった。有効回答数は147名(有効回答率81%)であった。回答者の性別は男性32.7%, 女性67.3%である。

2) 調査内容及び分析方法

教育実習の実態調査を含んだ質問紙全体は, 以下の8項目で構成した。ただし, 下線を引いた③と⑥と⑦の項目は今回は結果の報告を省略した。

- ①「体育授業の計画時間」
- ②「体育授業の指導時間」
- ③「体育授業で指導教官に指導・助言して欲しい内容」
- ④「体育授業の指導に役に立つ情報源」
- ⑤「体育授業の実際の指導者」
- ⑥「体育授業の適切な指導者」
- ⑦「大学の講義内容への要望」
- ⑧「体育授業を教える事の心配」

「体育授業を教える事の心配」の項目は, 5段階評定尺度法で記入させた。分析方法は, 実習生の教育実習前と教育実習後の平均値の差の検定を行った。

4. 結果

1) 実習生による体育指導の実態の把握

(1) 実習生の体育授業の指導と計画の実態

2002年度の实習生147名が体育の授業を指導し

た時間は, 0時間36名(24.5%), 1時間92名(62.6%), 2時間15名(10.2%), 3時間3名(2%), 5時間1名(0.7%), であった(図1参照)。実習生の76%が体育の授業を実際に指導し, 2000年度の55%と比較すると, 24ポイント増加した(図2参照)。

同じく体育の授業を計画した時間は, 0時間25

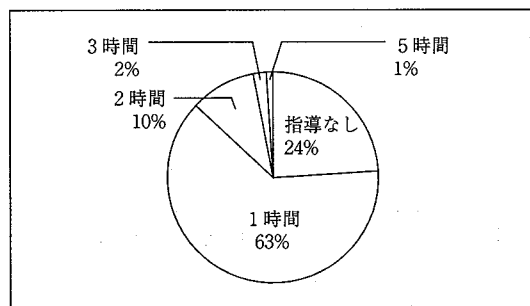


図1 実習生(2002年)の体育授業指導時間数(N:147)

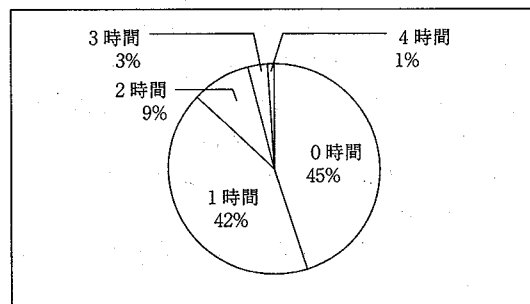


図2 実習生(2000年)の体育授業指導時間数(N:266)

名(17%), 1時間62名(42.2%), 2時間19名(12.9%), 3時間8名(5.4%), 4時間15名(10.2%), 5時間8名(5.4%), 6時間5名(3.4%), 7時間3名(2%), 8時間1名(0.7%), 12時間1名(0.7%)であった。実習生の83%が体育の授業を実際に計画し(図3参照), 2000年度の61%と比較すると, 22ポイント増加した(図4参照)。この計画の時間には一人で計画した場合と配属学級の実習生の集団で計画した場合の両方が含まれる。

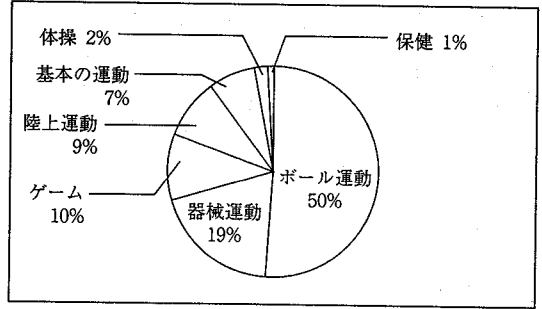


図5 実習生(2002年)の指導した運動領域(N:117)

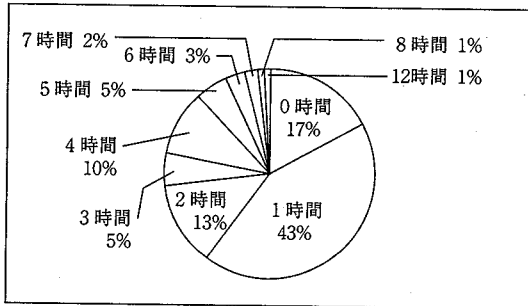


図3 実習生(2002年)の体育授業計画時間数(N:147)

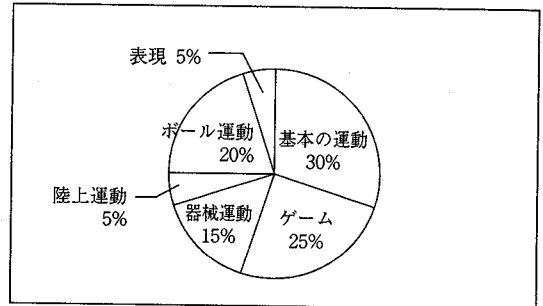


図6 実習生(2000年)の指導した運動領域(N:145)

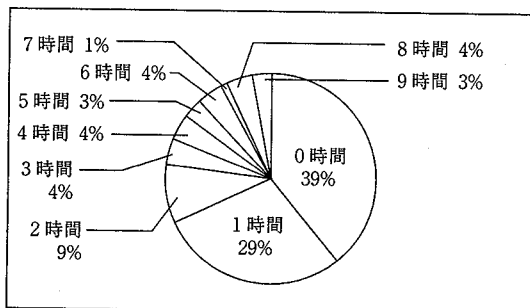


図4 実習生(2000年)の体育授業計画時間数(N:266)

図5及び図6は, 実習生が実際に指導した体育の授業を運動領域ごとに区分したものである。2002年度の結果は, ボール運動50.4%, 器械運動19.1%, ゲーム10.4%, 基本の運動7%, 陸上運動8.7%, 体づくり運動1.7%, 保健1.7%, 表現0.9%, 水泳0%であった(図5参照)。2000年の実習生と比べると, ボール運動とゲームの合計は45%から60.8%と15ポイント以上増加した。また, 基本の運動が30%から6.8%と23ポイント減少した。2000年には0であった保健を指導した実習生が2名現れた。

(2) 体育を教えることに役立つ情報源

体育の授業の計画を立て実際に指導したときに役に立つ助言や情報は誰から(どこから)手に入れたかを質問し, 最も役だった情報源と2番目に役立った情報源を一つづつ選ばせた。選択項目に設定した情報源は, A大学の体育講義や体育実技, B配属学級の指導教員, C小学校での体育授業の経験, D体育雑誌や体育専門書, E大学の教員, F配属学級以外の教員, G自分自身のスポーツ経

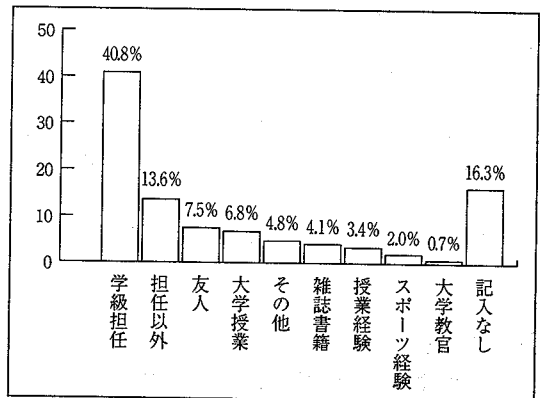


図7 体育を教えることに役立つ第1の情報源: 2002年(N:147)

教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究(その2)

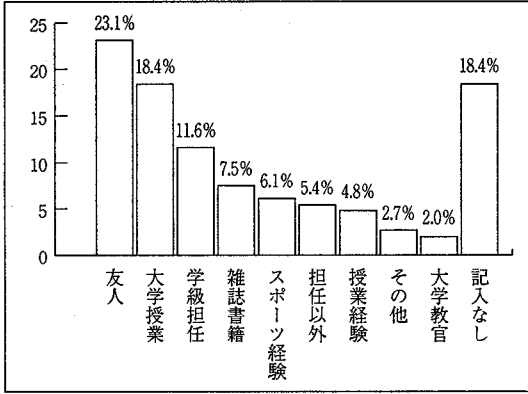


図8 体育を教えることに役立つ第2の情報源：2002年(N:147)

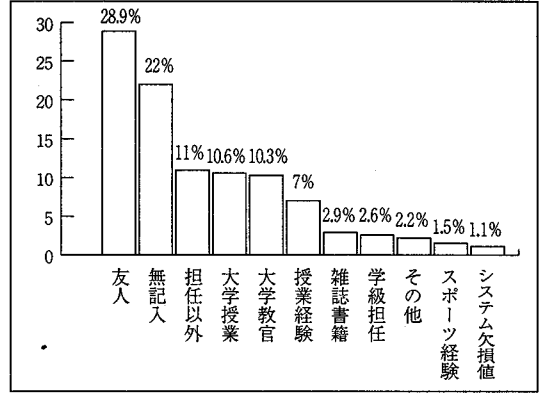


図10 体育を教えることに役立つ第2の情報源：2000年(N:266)

験, H友人の実習生であった。

2002年度の実習生では、一番役立つ情報源は、学級担任が40.8%で最も多く、以下担任以外の教師13.6%、友人7.5%、大学の授業6.8%と続いている。2番目に役立つ情報源は、友人が23.1%で最も多く、大学の授業18.4%、学級担任11.6%と続いている(図7, 図8参照)。

2002年度の「大学授業」の結果は2000年度の結果と比較すると、第1の情報源に関して、1.8%から6.8%と5ポイント増加し順位を8位から4位に上げた。第2の情報源に関しても、「大学授業」は10.6%から18.4%と8ポイント近く増加し順位を3位から2位に上げた(図9, 図10参照)。

なお、無記入がかなりあるが、これは体育の授業を計画も指導もしなかった実習生の回答と思われる。

(3) 体育授業の実際の指導者

小学校の教育実習で体育を教えることについて、実習生を指導したり助言したりしてくれた主な人を問い、A配属学級の指導教員、B体育部の教員、C配属学級の指導教員(体育部の教員でも

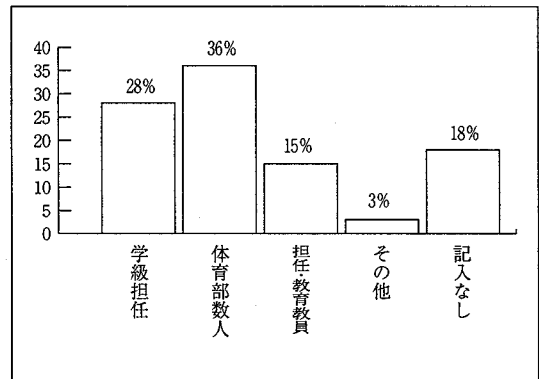


図11 体育授業の実際の指導者：2002年(N:147)

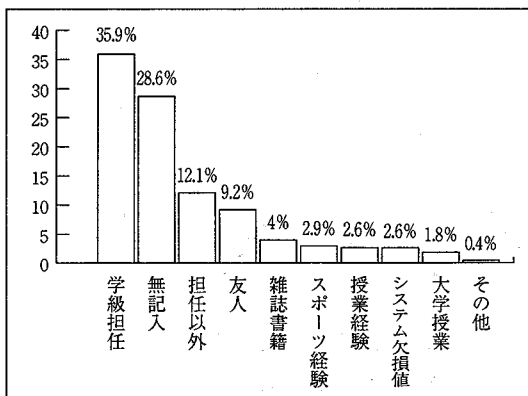


図9 体育を教えることに役立つ第1の情報源：2000年(N:266)

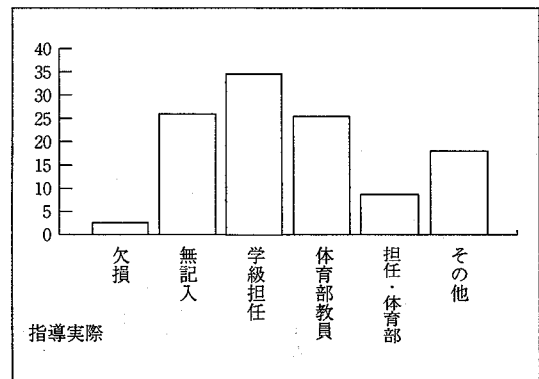


図12 体育授業の実際の指導者：2000年(N:266)

ある場合), D教頭(副校長)の各項目から主な人を1個選ばせた。

2002年の結果は図11, 2000年の結果は図12に示してあるが, 2000年は, 学級担任(35%), 体育部教員(25%), 担任かつ体育部教員(8%)と続いていたが, 2002年は, 体育部教員(36.1%), 学級担任(36.1%), 担任・体育教師(15%)と続いている。新たに教育実習校となった附属小学校が教科担任制をとっているためこのような変化が現れたと思われる。

2) 体育授業を教える事の心配

(1) 事前と事後の平均値の比較(2002年度)

表2及び図13は, 教育実習前と教育実習後の

2002年度の実習生の体育授業を教える事の心配の結果である。表2によれば, 心配の平均が増大, つまりより心配となった項目は, A(安全), B(不得意), G(把握), H(統制), K(施設管理), N(協力関係)の6項目である。この中でB(不得意)は1%水準で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られ, N(協力関係)は5%水準で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られた。逆に心配の平均が減少, つまりより心配でなくなった項目は, C(運動理解), D(行事予定), E(好意), F(模範), I(悪影響), J(つまずき), L(受け入れ), M(技術指導), O(振る舞い), P(技能向上), Q(ニーズ)の11項目である。この中でD(行事予定)とL(受け入れ)は1%水準

表2 教育学部(2002年度)の体育授業を教える事の心配(事前と事後の平均値の差)

質問項目(項目名)		事前(N:91)	事後(N:91)	事後-事前
		平均値(SD)	平均値(SD)	平均値の差
A	子どもが安全に運動できる(安全)	3.76(0.84)	3.94(0.94)	0.18
B	運動の苦手な子どもへの配慮ができる(不得意)	3.86(0.78)	4.08(0.82)	0.22 *
C	どの運動を教えるべきかを理解している(運動理解)	3.56(0.85)	3.52(0.82)	-0.04
D	学校の体育にかかわる行事予定を理解している(行事予定)	3.35(0.85)	3.02(0.93)	-0.33 *
E	子どもが私の授業を好意的に評価してくれる(好意)	3.84(0.83)	3.46(0.98)	-0.38 **
F	自分が模範を示せない種目の運動を教える(模範)	3.66(1.10)	3.44(0.98)	-0.22
G	授業中に一人一人の子どもを把握できる(把握)	4.02(0.80)	4.13(0.82)	0.11
H	子どもの行動をコントロールできる(統制)	3.89(0.84)	4.04(0.88)	0.15
I	今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう(悪影響)	3.11(0.91)	2.95(1.06)	-0.16
J	子どもたちの運動のつまずきを診断する(つまずき)	3.75(0.80)	3.74(0.94)	-0.01
K	体育用具の準備や体育施設の管理ができる(施設管理)	2.91(0.86)	2.99(0.98)	0.08
L	教師に認められ受け入れられること(受け入れ)	3.38(1.08)	3.10(1.05)	-0.28 *
M	各種目に必要な運動技能を指導できる(技術指導)	3.70(0.91)	3.59(0.95)	-0.11
N	子ども同士の協力的な関係をつくる(協力関係)	3.37(0.83)	3.73(0.92)	0.36 **
O	学校の教員の前でうまく行動する(振る舞い)	3.46(1.06)	2.81(1.04)	-0.65 **
P	運動技能を向上させる指導ができる(技能向上)	3.79(0.77)	3.75(0.77)	-0.04
Q	いろいろな子どもたちのニーズに合わせる(ニーズ)	3.83(0.74)	3.82(0.80)	-0.01

\*\*P<0.01 \*P<0.05

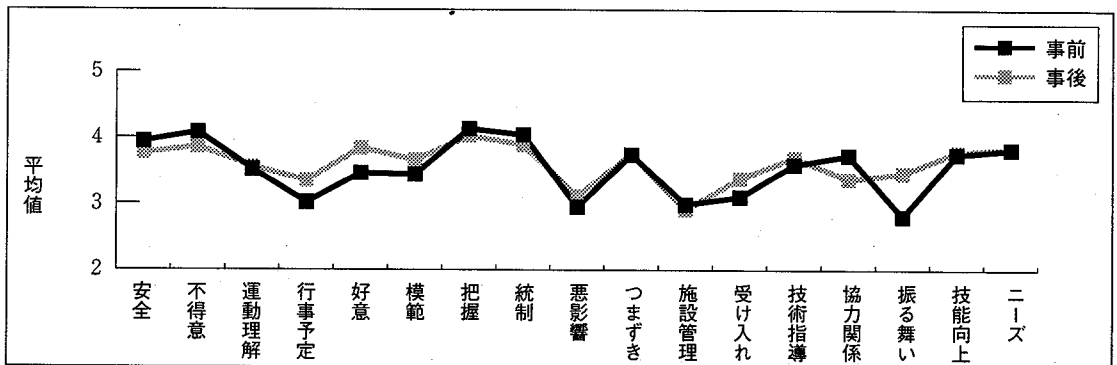


図13 教育学部(2002年度)の体育授業を教える事の心配(事前と事後の平均値の差)

で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られ、E(好意)とO(振る舞い)は5%水準で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られた。

1%もしくは5%水準で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られた項目の中で、実習前に比べて実習後により心配でなくなった分類は、4)行事予定(D)と1)教師としての資質(E, L, O)である。当初教師としての資質と設定した4項目のうち、I(悪影響)も有意な差はないが実習後の方がより心配でなくなった。

1%もしくは5%水準で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られた項目の中で、実習前に比べて実習後により心配になった項目は、3)子

どもを把握する課題に分類されたB, Nである。

(2)学校教育学部(2000年度)と教育学部(2002年度)の比較

表3は、学校教育学部(2000年度)の体育授業を教える事(2000年度)の事前の平均値と事後の平均値、さらに両者の平均値の差を示している。図14は、教育学部(表2)と学校教育学部(表3)のそれぞれの事前の平均値と事後の平均値の差、つまり心配の変化量を示している。

図14によると、教育学部と学校教育学部の間で心配の変化量が大きく異なっているのは、A安全とD行事予定とF模範とI悪影響の4項目である。その中で、A安全は教育学部と学校教育学部がともに心配を増加(+ )させ、D行事予定はともに心配を減少(- )させている。両者の相違は、変化量が大きいのか小さいかの違いである。これに対して、F模範とI悪影響は、学校教育学部が心配を増加させているのに対し、教育学部は心配を減少させている。なお、これらの4項目以外は教育学部と学校教育学部の変化量の傾向はほぼ同じである。

表4は、教育学部の事前平均値と学校教育学部の事前平均値の差、また両者の事後平均値の差を示している。表4によれば、教育学部の事前の平均値は学校教育学部(表3)に比べて、D:行事予定、F:模範、O:振る舞いの3項目が小さく、その他の項目はすべて大きい。つまり、D、F、E以外の項目の心配が大きいということである。また、教育学部の事後の平均値は学校教育学部(表3)に比

表3 学校教育学部(2000年度)の体育授業を教える事(2000年度)の事前と事後の平均値の差

質問項目名	事前(N:254) 平均値(SD)	事後(N:266) 平均値(SD)	事後-事前 平均値の差
A安全	3.49(0.87)	4.0(0.96)	0.51*
B不得意	3.68(0.8)	3.9(0.99)	0.22*
C運動理解	3.5(0.81)	3.43(0.97)	-0.07
D行事予定	3.48(1.01)	2.86(0.93)	-0.62*
E好意	3.75(0.86)	3.35(0.98)	-0.4*
F模範	3.78(1.18)	3.53(1.2)	0.25**
G把握	3.78(0.83)	3.94(0.97)	0.16**
H統制	3.65(0.89)	3.78(0.99)	0.13
I悪影響	2.81(0.89)	3.0(1.04)	0.19**
Jつまずき	3.36(0.81)	3.49(0.89)	0.13
K施設管理	2.59(0.84)	2.74(0.93)	0.15**
L受け入れ	3.36(0.95)	3.08(0.93)	-0.28*
M技術指導	3.6(0.93)	3.51(1.01)	-0.09
N協力関係	3.09(0.84)	3.5(1.08)	0.41*
O振る舞い	3.49(1.02)	2.97(0.92)	-0.52*
P技能向上	3.62(0.89)	3.64(0.97)	0.02
Qニーズ	3.58(0.88)	3.63(1.02)	0.05

\*\*P<0.01 \*P<0.05

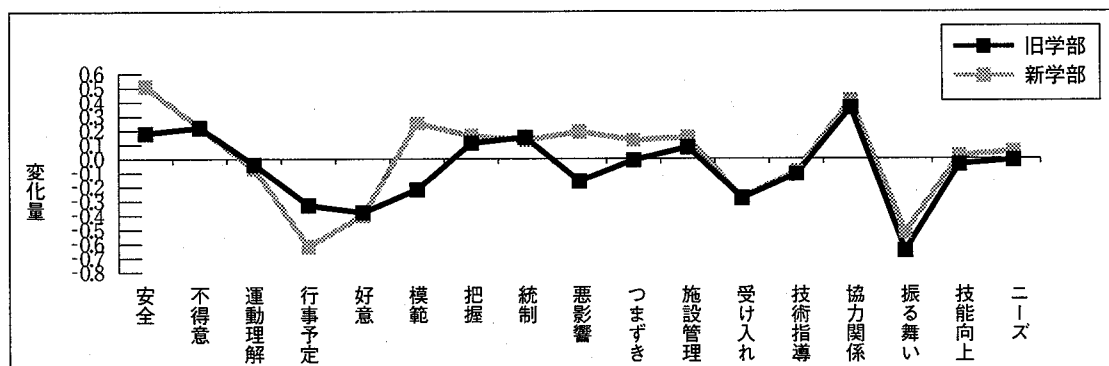


図14 体育授業を教える事(2000年度)の事前と事後の平均値の差(学校教育学部と教育学部の)

表4 体育授業を教える事の心配(学校教育学部と教育学部の事前の平均値の差と事後の平均値の差)

	教育学部-学校教育学部	
	事前平均値の差	事後平均値の差
A 安全	0.27	-0.06
B 不得意	0.18	0.18
C 運動理解	0.06	0.09
D 行事予定	-0.13	0.16
E 好意	0.09	0.11
F 模範	-0.12	-0.09
G 把握	0.24	0.19
H 統制	0.24	0.26
I 悪影響	0.3	-0.05
J つまずき	0.39	0.25
K 施設管理	0.32	0.25
L 受け入れ	0.02	0.02
M 技術指導	0.1	0.08
N 協力関係	0.28	0.23
O 振る舞い	-0.03	-0.16
P 技能向上	0.17	0.11
Q ニーズ	0.25	0.19

\*\*P<0.01 \*P<0.05

て、A：安全、F：模範、I：悪影響、O：振る舞いの4項目が小さく、その他の項目はすべて大きい。つまり、A、F、I、O以外の項目の心配が大きいということである。

なお、1%もしくは5%水準で平均値の差に有意な差が見られた項目は11あったが、事前平均値と事後平均値の両方ともすべて教育学部の方が

心配が大きかった。模擬授業を教育実習の事前の大学の授業で取り入れた教育学部の方が、全体として事前も事後も心配は増大したと思われる。

(3) 指導群と非指導群の比較(2002年度)

表5及び表6は、体育授業の指導を経験した指

表6 体育授業を教える事の心配(非指導群の事前平均値と事後平均値の差)

	非指導群(N:19)		
	事前	事後	事後-事前
A	3.37(0.76)	3.79(0.92)	0.42
B	3.74(0.81)	3.74(0.93)	0
C	3.68(0.75)	3.42(0.69)	-0.26
D	3.22(0.88)	2.94(0.94)	-0.28
E	3.74(0.81)	3.79(0.86)	0.05
F	3.95(1.27)	3.84(0.96)	-0.11
G	4.00(0.88)	4.10(0.81)	0.01
H	4.00(0.75)	4.05(0.85)	0.05
I	3.42(0.96)	3.16(1.21)	-0.26
J	3.79(0.92)	3.84(0.90)	0.05
K	2.89(0.99)	3.26(0.87)	0.37
L	3.42(0.77)	3.32(0.75)	-0.1
M	3.89(0.88)	3.89(0.57)	0
N	3.00(0.88)	3.79(0.86)	0.79
O	3.32(0.75)	2.95(1.03)	-0.37
P	3.74(0.87)	3.84(0.69)	0.01
Q	3.68(0.75)	3.79(0.71)	0.11

\*\*P<0.01 \*P<0.05

表5 体育授業を教える事の心配(指導群の事前平均値と事後平均値の差)

質問項目(項目名)	事前			
	全体(N:91)	指導群(N:72)		事後-事前
	平均値(SD)	事前	事後	
A 子どもが安全に運動できる(安全)	3.76(0.84)	3.86(0.83)	3.99(0.94)	0.13
B 運動の苦手な子どもへの配慮ができる(不得意)	3.86(0.78)	3.89(0.78)	4.17(0.77)	0.28
C どの運動を教えるべきかを理解している(運動理解)	3.56(0.85)	3.52(0.88)	3.55(0.86)	0.03
D 学校の体育にかかわる行事予定を理解している(行事予定)	3.35(0.85)	3.38(0.85)	3.04(0.93)	-0.34
E 子どもが私の授業を好意的に評価してくれる(好意)	3.84(0.83)	3.87(0.84)	3.37(1.00)	-0.5
F 自分が模範を示せない種目の運動を教える(模範)	3.66(1.10)	3.58(1.05)	3.34(0.97)	-0.24
G 授業中に一人一人の子どもを把握できる(把握)	4.02(0.80)	4.03(0.79)	4.14(0.82)	0.11
H 子どもの行動をコントロールできる(統制)	3.89(0.84)	3.86(0.86)	4.04(0.90)	0.18
I 今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう(悪影響)	3.11(0.91)	3.03(0.89)	2.89(1.01)	-0.14
J 子どもたちの運動のつまずきを診断する(つまずき)	3.75(0.80)	3.74(0.77)	3.70(0.96)	-0.04
K 体育用具の準備や体育施設の管理ができる(施設管理)	2.91(0.86)	2.92(0.84)	2.92(1.00)	0
L 教師に認められ受け入れられること(受け入れ)	3.38(1.08)	3.37(1.17)	3.04(1.11)	-0.33
M 各種目に必要な運動技能を指導できる(技術指導)	3.70(0.91)	3.65(0.91)	3.50(1.01)	-0.15
N 子ども同士の協力的な関係をつくる(協力関係)	3.37(0.83)	3.46(0.79)	3.72(0.94)	0.26
O 学校の教員の前でうまく行動する(振る舞い)	3.46(1.06)	3.49(1.13)	2.77(1.04)	-0.72
P 運動技能を向上させる指導ができる(技能向上)	3.79(0.77)	3.80(0.74)	3.72(0.79)	-0.08
Q いろいろな子どもたちのニーズに合わせる(ニーズ)	3.83(0.74)	3.87(0.73)	3.83(0.83)	-0.04

\*\*P<0.01 \*P<0.05



導群と経験していない非指導群別に、事前と事後の平均値を比較した結果である。指導群を見ると、心配の平均が他の項目よりも大きく増加した項目は、B(不得意)、N(協力関係)の2項目であった。この中でB(不得意)は5%水準で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られた。逆に心配の平均が他の項目よりも大きく減少した項目は、D(行事予定)、E(好意)、F(模範)、L(受け入れ)、O(振る舞い)の5項目であった。この中でD(行事予定)は5%水準、F(模範)は1%水準で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られた。

さらに非指導群を見ると、心配の平均が他の項目よりも大きく増加した項目は、A安全とK施設管理、N(協力関係)の3項目であった。この中でN(協力関係)は1%水準で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られた。逆に心配の平均が他の項目よりも大きく減少した項目は、C(運動理解)、D(行事予定)、I(悪影響)、O(振る舞い)の4項目であった。この中に実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られた項目はなかった。

1%もしくは5%水準で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られた項目の中で、実習前に比べて実習後により心配でなくなった項目の分類は、指導群の場合3)教師としての資質(E、O)と4)行事予定(D)とであり、非指導群には項目がなかった。また、1%もしくは5%水準で実習前の平均と実習後の平均に有意な差が見られた項目の中で、実習前に比べて実習後により心配になった項目は、指導群の場合3)子どもを把握する課題に分類されたB:不得意であり、非指導群では、3)子どもを把握する課題に分類されたN:協力関係であった。

#### おわりに

以上の結果から得られた知見は以下の通りである。

第1に、2000年度と比較して2002年度の教育実習で改善された点は次の2点である。①体育の授業を指導した実習生と計画した実習生の割合がそれぞれ24ポイントと22ポイント増加したこと。②大学の授業を体育の授業を教えることに役立つ第1および第2の情報源と回答した実習生がそれ

ぞれ5ポイントと8ポイント増加したこと。

第2に、2000年度と比較して2002年度の教育実習で課題となった点は、指導した運動領域の中でボール運動とゲームの合計が15ポイント以上増加して60.8%となり内容のバランスが悪くなった点である。

第3に、2002年度の教育実習生は2000年度と比較すると、事前と事後ともに体育の授業をより心配に思った項目が多かった。同時に、2002年度の教育実習生に関して、体育の授業を指導した指導群が3項目の心配を減少させていたのに対し、非指導群は減少させた項目を見出せなかった。

2002年度の教育実習生が教育実習前に体育の授業の指導をより心配に思ったことは、教育実習前に模擬授業を通して体育の授業の計画や指導を実際に経験し課題を自覚した結果であるように思われる。ただし、教育実習での経験は、非指導群を中心に教育実習生に体育の授業を指導することに対して心配な傾向を強めた結果になった。体育の授業の指導に関して課題を自覚した実習生に対し、どのように心配な事項に対処するかを学ぶことを内容とした教育実習後の大学の授業の整備が今後の課題として残された。

謝辞：2002年度の調査にあたり、広島大学附属三原小学校の松田美祈子副校長先生、附属東雲小学校の上之園強副校長先生、並びに附属小学校の神津弘之副校長(当時)先生を始めとする諸先生方とりわけ、体育部の川本先生(当時)、宮本先生、今村先生、島本先生、林先生、大上先生、大後戸先生さらに2002年度の教育実習に参加された教育学部1類の3年生の皆さんには本当にお世話になりました。ここに記して感謝の意を述べたいと思います。

(本研究は日本学術振興会科学研究費<基盤研究B(1)課題番号15300214, 研究代表者:木原成一郎>及び<基盤研究B(1)課題番号14380107, 研究代表者:磯崎哲夫>の補助で行った研究成果の一部である。)

#### <文献>

1. 木原成一郎, 松田泰定「教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究」『学校教

- 育実践学研究』第8巻, 2002年3月, pp.1-8.
2. 日本教育大学協会「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクト「教員養成の『モデル・コア・カリキュラム』の検討—『教員養成コア科目群』を基軸にしたカリキュラムづくりの提案—中間答申」日本教育大学協会, 2004年9月11日。
  3. 長谷川悦示・岡出美則・高橋健夫他「大学における体育教師教育カリキュラムの検討」『スポーツ教育学研究 第21回大会号』日本スポーツ教育学会, 2001年, p.42.
  4. 日野克博「体育教師教育カリキュラムの検討—愛媛大学での模擬授業の実践を例にして」『スポーツ教育学研究 第22回大会号』日本スポーツ教育学会, 2002年, p.41.